

支援者に必要なQOLの4つの視点

～利用者のための個別支援計画について考える～

北村梨紗 志賀あう 清水れい子 高橋里奈 深作彩乃

1. はじめに

私たちのグループメンバーは、特別養護老人ホーム、障害者支援施設、急性期病院で社会福祉援助技術現場実習Ⅰ(以下、実習とする)を行った。

実習後、私たちは実習での体験を振り返った。その中で、施設入所者への支援に興味を持った。さらに話し合いを進めていくと、メンバーの多くが、「個別支援計画の支援目標を立てることが難しい。」と発言した。しかし、支援目標を立てることが困難であっても、支援目標は利用者のものであるため、支援において大切にすべきことである。そのため、支援目標を大切に、利用者のよりよい生活の実現につなげていきたいと思った。

そこで私たちは、社会福祉援助技術総論の講義ノートを見直し、支援者は利用者のよりよい生活を実現するために、QOLに着目することが大切だと改めて理解した。そのため、本報告を通し、QOLに着目した支援目標の立て方について研究していきたい。

2. 研究方法

- ① 実習での個々の体験をそれぞれ上げる
- ② 個々の体験から共通点を見つけ、研究のテーマを決める
- ③ テーマに関連する文献や論文を集める
- ④ 実習の体験と参考資料を照らし合わせ、考察をする
- ⑤ 実習担当教員と面談を行う
- ⑥ 面談での助言をもとに話し合い、考察を深める
- ⑦ 資料を作成する
- ⑧ 実習担当教員と面談を行う
- ⑨ 面談での助言をもとに話し合いを行う
- ⑩ 報告会で研究発表を行う
- ⑪ 本研究での学びを実践につなげる

3. 先行研究

(1) 個別支援計画について

・個別支援計画の特徴

本人の望む生活が実現できるような支援を行うための「計画」であること。

引用：松端克文『障害者の個別支援計画の考え方・書き方』日総研出版 2004年

・個別支援計画作成の目的

個別支援計画を作成する目的は、大きく分けると2つであるといえる。1つは利用者がエンパワーメントしていくことを支援することである。そしてもう1つは、利用者の生活の質(Quality of Life: QOL)を向上させていくことである。

引用：松端克文『障害者の個別支援計画の考え方・書き方』日総研出版 2004年

(2) QOLの定義

個人が生活する文化や価値観のなかで、目標や期待、基準または関心に関連した自分自身の人生の状況に対する認識である

引用：田中農夫男・木村進『ライフサイクルからよむ障害者の心理と支援』福村出版
2009年

(3) QOLの構成要素

領域	下位項目
身体的領域	日常生活動作、医薬品と医療への依存、活力と疲労、移動能力、痛みと不快、睡眠と休養、仕事の能力
心理的領域	ボディ・イメージ、否定的感情、肯定的感情、自己評価、精神性・宗教・信念、思考・学習・記憶・集中力
社会的関係	人間関係、社会的支え、性的活動
環境領域	金銭関係、自由・安全と治安、健康と社会的ケア：利用のしやすさと質、居住環境、新しい情報・技術の獲得の機会、余暇活動への参加と機会、生活圏の環境、交通手段

引用：田中農夫男・木村進『ライフサイクルからよむ障害者の心理と支援』福村出版
2009年

4. 先行研究の考察

『3. 先行研究』から、個別支援計画は本人の望む生活が実現できるような支援を行うための「計画」であり、利用者の生活の質(Quality of Life: QOL)を向上させていくことが目的であると改めて理解した。さらに、QOLとは人生の状況をとらえるものであり、QOLは4つの構成要素(身体的領域、心理的領域、社会的関係、環境領域)で成り立っていると知った。私たちは、この4つの構成要素をQOLの4つの視点と呼ぶ。

ソーシャルワーカーは、個別支援計画を作成する際、QOLを考慮して支援目標を立てている。しかし、実習生は知識や経験が乏しいため、QOLの4つの視点を可視化した方が利用者のための支援目標を立てやすくなるのではないかと考えた。

そのため、私たちはQOLの4つの視点を個別支援計画の『支援目標』に項目として取り入れた。そして、このQOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画を、**QOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画**と名付けることにした。

[QOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画] (図-1)

生活全般の解決すべき課題(ニーズ)	背景要因	支援目標	期間	支援内容					モニタリング時期
				援助内容	担当職種	いつ	どこで	期間	
		QOL (身体・心理・社会・環境)							

5. 仮事例

【設定】

利用者A（以下Aさんとする）

- ・20歳のときに、交通事故により両下肢麻痺、高次脳機能障害と診断される
- ・障害支援区分6
- ・障害者支援施設（以下、本施設とする）に入所中
- ・移動手段は車いすであり、自操が可能である
- ・短時間であれば座位保持が可能である
- ・趣味としてパソコンを楽しんでいる（自分でタイピングができる）
- ・何事にも一生懸命に取り組む一方、障害を負ってから自分に対する自信を失っている
- ・他の利用者と仲がよい
- ・周りの人から人望がある
- ・障害を受ける前はメディア関係の仕事に就きたかった



Aさん
(28歳、女性)

実習生

- ・Aさんを個別支援計画作成の対象者にした



実習生
(21歳、女性)

【場面1-1】個別支援計画の作成

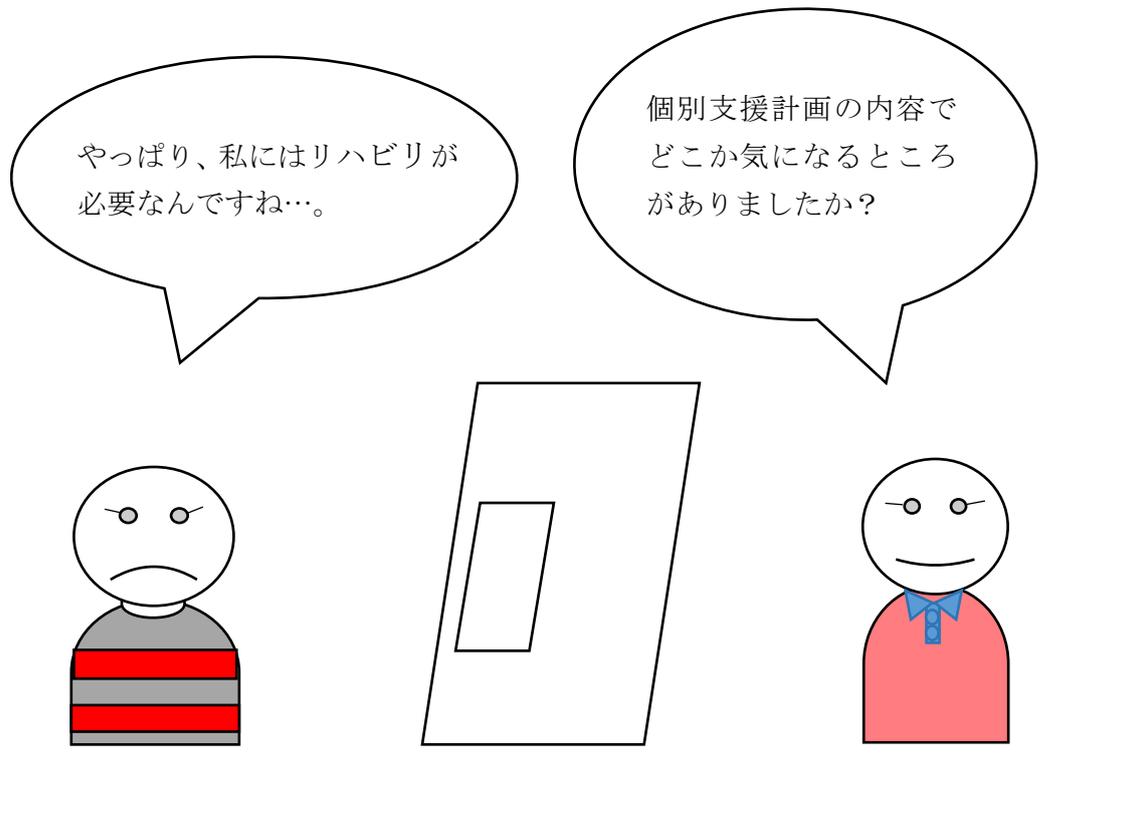
Aさんから「新聞を作りたい。」という発言があった。障害を受ける以前、Aさんはメディア関係の仕事に就くことが夢であった。そのため、実習生はAさんの生活課題を“来訪者に施設での出来事を発信する施設新聞を作ること”とし、個別支援計画①を作成した。

個別支援計画①

生活全般の解決すべき生活課題(ニーズ)	背景要因	支援目標
施設新聞をつくりたい。	現在の身体機能では、新聞をつくるのが難しいため。	新聞づくりで長時間パソコンを使うため、座位を保持できるように筋力の維持・向上を目指す。
	同上	新聞づくりでパソコンを使うため、手指の関節可動域の維持向上を目指す。
	同上	皆に喜んでもらえるような新聞を作るための記事内容を考える。

【場面1－2】模擬カンファレンスの実施

実習生がAさんに、個別支援計画①の説明をしたところ、Aさんは浮かない表情を見せた。実習生はAさんがなぜ、浮かない表情をしたのか気になり、Aさんに個別支援計画に関して質問がないか確認した。すると、Aさんから「今の私には、リハビリが必要なんだということを実感してしまって…」という意見があった。



〈場面1－2の考察〉

Aさんの表情や発言から、実習生は個別支援計画の支援目標の立て方に課題が残ったことに気づいた。そのため、実習生は支援目標を立てる際に重視すべき点を確認し、QOLを考慮することが大事であることを知った。そして、実習生は自分が立てた支援目標はQOLに着目できていなかったことに気づいた。したがって、実習生は支援目標を立てる際には、QOLの4つの視点が重要なのではないかと考えた。

【場面2】QOLの4つの視点との比較

実習生は個別支援計画①にQOLの4つの視点を当てはめた。その結果が、個別支援計画②である。

個別支援計画② [QOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画]

生活全般の解決すべき生活課題(ニーズ)	背景要因	支援目標
施設新聞をつくりたい。	現在の身体機能では、新聞をつくるのが難しいため。	QOL(身体・心理・社会・環境) 新聞づくりで長時間パソコンを使うため、座位を保持できるよう筋力の維持・向上を目指す。
	同上	QOL(身体・心理・社会・環境) 新聞づくりでパソコンを使うため、手指の関節可動域の維持向上を目指す。
	同上	QOL(身体・心理・社会・環境) 皆に喜んでもらえるような新聞を作るための記事内容を考える。

<場面2の考察>

実習生が個別支援計画②を作成した結果、支援目標が**身体的領域**と**心理的領域**にしか当てはまらなかった。このことから、実習生はAさんの**社会的関係**と**環境領域**に目を向けることができなかったことに気づいた。そのため、利用者は浮かぬ表情をしていたと考えた。

【場面3-1】QOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画の作成

実習生は気づきをもとに改めて、QOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画を作成した。それが個別支援計画③である。

個別支援計画③ [QOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画]

生活全般の解決すべき生活課題(ニーズ)	背景要因	支援目標
施設新聞をつくりたい。	現在の身体機能では、新聞をつくるのが難しいため。	QOL(身体・心理・社会・環境) 身体機能訓練を行い、新聞づくりをするための体力の維持・向上を目指す。
	同上	QOL(身体・心理・社会・環境) 記事を作成するイメージを膨らませるため、ネタ帳を作る。
	新聞づくりは他者の協力が不可欠であるため。	QOL(身体・心理・社会・環境) 施設内で、新聞づくりのチームメンバーを選定する。
	新聞をつくりたいが、パソコン操作や編集の仕方でわからないことがあるため。	QOL(身体・心理・社会・環境) パソコンの基本操作や編集の仕方を習得するため、編集経験のあるボランティアの方から教わる。

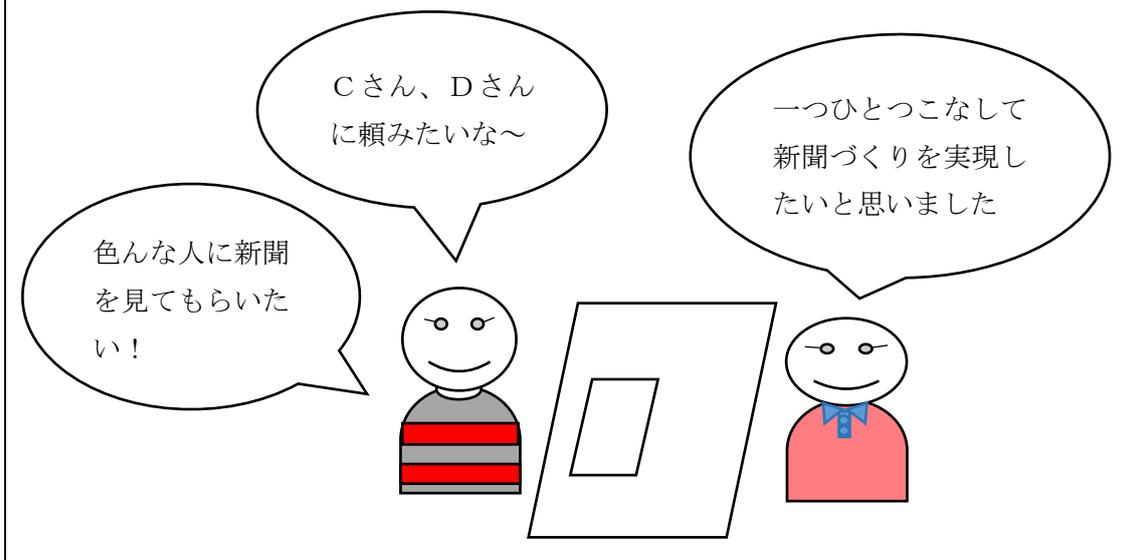
〈場面3-1の考察〉

実習生は、QOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画を使用したことで、社会的関係と環境領域に目を向けることができた。そして、QOLの4つの視点すべてを明確に示した支援目標を立てることができた。

【場面3-2】2度目の模擬カンファレンス

実習生はAさんに対し、再度模擬カンファレンスを行い、個別支援計画③の説明をした。その中で、実習生は「リハビリや編集の仕方などを一つひとつやっていくことで、Aさんの新聞づくりを実現したいと考えました。」と作成の意図を説明した。

Aさんは大きくうなずきながら、笑顔を見せた。そして、Aさんから「Cさんは物知りだから、記事の一部を担当してもらおうかな。」や「Dさんは、絵が得意だから表紙をお願いしようかな。」などの積極的な発言があった。さらに、「自分が作った新聞を施設内だけじゃなくて、もっといろんな人に見てもらいたいな。」という発言があった。



〈場面3-2の考察〉

実習生は、Aさんが個別支援計画③に関心を示していたことから、Aさんが自分自身の生活を意識し始めたことに気づいた。このことから、支援者は現在だけでなく、将来のことを見据えた支援目標を考えることが必要であり、それが利用者の意向や向上心につながると考えた。

仮事例を通して、個別支援計画の支援目標にQOLの4つの視点を項目として取り入れることで利用者のQOLを考慮することができ、利用者のよりよい生活の実現につながることが明らかになった。

6. 総合的な考察

私たちは、QOLに着目した支援目標の立て方について研究を進めてきた。

先行研究の考察では、実習生は知識や経験が乏しいため、QOLの構成要素を可視化することで、利用者のための支援目標を立てやすくなるのではないかと考えた。そのため、私たちは**QOLの4つの視点**を個別支援計画の『支援目標』に項目として取り入れた。そして、その個別支援計画を、**QOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画**と名付けることにした。

次に、仮事例を通して、**QOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画**を活用することで、支援目標を立てやすくなるか検討した。その結果、利用者のQOLを考慮することで、実習生は支援目標を立てやすくなり、利用者は自分自身の生活により関心を持つようになると理解した。

そして、今回QOLの研究に取り組んだことで新たに見えてきた課題が2つある。1つ目は、障害受容についてだ。利用者の障害受容の段階はさまざまである。そのため、**QOLの4つの視点**を取り入れた個別支援計画の支援目標を立てる際、**QOLの4つの視点**の中でも重きを置くポイントが異なる。したがって、支援者は一人ひとりの障害受容の段階を考慮しながら支援目標を立てる必要があると考えた。

2つ目は、見通しの立てやすさについてである。今回作成した**QOLの4つの視点を取り入れた個別支援計画**の支援目標には短期・長期目標が記されておらず、利用者が生活の見通しを立てにくいと考える。そのため、長期目標と短期目標に分けそれぞれ期間を設定し、より利用者が生活の見通しを立てやすくなるようにしたいと考えた。それにより、利用者は小さい目標の一つひとつ達成し、大きい目標に向かっていく過程で、自分の生活をより具体的にイメージしながら生活していくことができると考えた。

これらの課題も含め、本研究から多くのことを学んだ。そのため私たちは、本研究での学びを生かし、利用者のよりよい生活の実現を目指した支援をするソーシャルワーカーになりたい。

7. おわりに

本日は、お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。

私たちは、これまで懸命に話し合いを重ね、準備をしてきました。そして今日、3年間の集大成となる研究の発表をすることができました。この研究の発表を行うことができたのは、実習先の職員、利用者、そのご家族の皆様のご協力のおかげです。そして、熱いご指導をくださった実習担当教員、実習助手の方、先輩方、後輩たち、家族など、私たちが学ぶ中でかかわったすべての皆様のおかげです。心から感謝しております。そして、この1年間支えあってきた実習生の仲間たち、それぞれが頑張っている姿を見て刺激になり、それが励みになりました。みんなと一緒に頑張ることができ本当に良かったです。

これから私たちは、社会福祉士国家資格取得に向け、勉強を進めていきます。そして、将来、ソーシャルワーカーとして利用者を支援していけるよう精進していきます。本日は、最後まで発表を聞いていただき、ありがとうございました。

8. 参考文献

- ・ 社会福祉士養成講座編集委員会『障害者に対する支援と障害者自立支援制度』中央法規 2019年
- ・ 田中農夫男・木村進『ライフサイクルからよむ障害者の心理と支援』福村出版 2009年
- ・ 松端克文『障害者の個別支援計画の考え方・書き方』日総研出版 2004年